

《論 文》

キーツのソネット
—理想の詩形を求めて—

桑 野 久 子

Keats's Sonnets:
In Quest for an Ideal Poetic Form

HISAKO KUWANO

キーワード

ジョン・キーツ (John Keats), ソネット (Sonnet), イギリス・ロマン派 (English Romanticism),
リー・ハント (Leigh Hunt)

1 はじめに

ジョン・キーツ (John Keats) の名を文学史に残しているのは、一連の有名なオードの創作によるものであることは誰もが認めるところであろう。「驚異の年」と呼ばれる1819年に作られたこれらの傑作が突然生まれてきたわけではない。1814年からのたった7年間ではあるが、詩作の積み重ねの結果である。長編詩を成功させて偉大な詩人の仲間入りをするという望みとは形は違った上、生前に叶うことはなかったが、名声を残すという野望は達成したと言える。その初期の詩作の中に数多くみられるのがソネットである。1814年から1819年までの間に64編のソネットを創作している。そしてこのソネット創作が後のオードの下地になっていることは明らかであるが、そこまでの詩形の変遷を通して、初期の詩作に多大な影響を与えたリー・ハント (Leigh Hunt) との関係を見ながら、今一度キーツにとってのソネットはどのようなものなのかを考察したい。

2

ロマン派の時代、ワーズワス、コールリッジ、バイロン、シェリーも、ブレイク以外の詩人はみなソネットを残している。中でもワーズワスはソネットという形式に関心を持ち、500以上ものソネットを残している。「ソネットを嘲るな」"Scorn not the Sonnet; Critic, you have frowned, / Mindless of its just honours;"で始まるワーズワスのソネット (1802) によると、ソネットという詩の形式が軽視されていた時代があったことがわかる。それに対してワーズワスはシェイクスピア、ペトラルカ、タッソー、カモンイス、ダンテ、スペンサー、そしてミルトンまで、過去の偉大なソネット詩人達の名前を挙げてソネットの名誉を回復することを願っている。

そもそもソネットは1230年代半ばにシチリアで始まったとされる、その名の通り短い詩、14行詩である。¹⁾ 神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ2世の宮廷に仕えていた、シチリア派のジャコモ・ダ・レンティーニが創始者とされている。ソネットはその後トスカーナへ渡り、同時代のイタリア詩人、ダンテやペトラルカらに

よっても作られるようになった。このイタリア式ソネットあるいはペトラルカ式ソネットと呼ばれる形式では、前半のオクターヴ（8行連句）と後半のセステット（6行連句）の2部構成になっている。その中でも前半は最初の4行で問題提起がなされ、次の4行で換言・限定・対照などが行われる。後半の最初に“volta”と呼ばれる転換点があり、先の3行で解決に向かい、最後の3行で結論が述べられるという内容構成になっている。更に押韻はabbaabba cdecde或いはcdccdcと決まっている。

このソネットがイギリスに持ち込まれたのは16世紀トマス・ワイアットがペトラルカのソネットを翻訳し、自らも作詩したことによる。その後ルネサンス期に多くのソネットが創作されるのだが、多くの詩人がイタリア語との違いから、英語でこの押韻形式に整えることに困難を感じたようである。様々な試行錯誤があったが、シェイクスピアが用いたabab cdcd efef gg という形式がイングリッシュ・ソネットあるいはシェイクスピア式ソネットとして確立する。押韻形式の変化に伴って構成も3つの4行連句と2行連句となり、内容構成にも影響を与えたと思われる。

ソネットの主題は主として恋愛であったが、17世紀に入り、ダンが宗教を、そしてミルトンが政治を主題としたソネットを書くことで、主題についても制限がなくなっていく。ミルトンはペトラルカ式ソネットで創作したが、「転換点」を後半ではなく、前半の終わりに置くことで、一体感を出した。そのミルトンを後にワーズワスが賞賛することになるのだが、ミルトン以降、ソネットはしばらく冷遇される時代にな

る。

サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) は『英語辞典』*A Dictionary of the English Language* (1755) で「ソネット」を“not very suitable to the English language”と説明し、“sonneteer”を“small poet”と軽蔑している。²⁾ そのようなソネット蔑視の時代を経て、前述のワーズワスのソネットにつながる。

ロマン派の時代のソネットのリバイバルには、ワーズワスよりも前にソネットを取り上げた詩人たち、特にシャーロット・スミス (Charlotte Smith) ら女性詩人の活躍が大きく影響している。ワーズワスはケンブリッジ大学在学中に彼女の『哀歌調ソネット、およびその他の詩』*Elegiac Sonnet, and Other Poems* (1784) を購読している。³⁾ この本は1800年までに9版まで版を重ね、非常に人気を博した。主題も「語り手の嘆き、怒り、切望あるいは喪失感など個人の感情の発露である叙情詩へとその範囲を拡大した」ものとなっている。⁴⁾ スミスはペトラルカ式を避けてシェイクスピア式あるいは不規則な形式で書いているが、そのことについて第1版の序文で次のように述べている。

The Little Poems which are here called Sonnets, have I believe, no very just claim to that title; but they consist of fourteen lines, and appear to me no improper vehicle for a single Sentiment. I am told, and I read it as the opinion of very good judges, that the legitimate Sonnet is ill calculated for our language.⁵⁾

ペトラルカ式ソネットを「正当な」と呼び、伝

1) Cf. Paula R. Feldman and Daniel Robinson ed., *A Century of Sonnets: The Romantic-Era Revival 1750-1850* (Oxford: Oxford University Press, 1999), 3-19, John Fuller ed., *The Oxford Book of Sonnets*. (Oxford: Oxford University Press, 2000), xxv-xxxii, Stuart Curran, *Poetic Form and British Romanticism*. (Oxford: Oxford University Press, 1986), 29-55, Michael O'Neill, “The Romantic sonnet”, A.D.Cousins & Peter Howarth ed., *The Cambridge Companion to the Sonnet*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2011), 185-203.

2) Samuel Johnson *A Dictionary of the English Language*.

3) Paula R. Feldman and Daniel Robinson, 15.

4) 新見肇子『シャーロット・スミスの詩の世界』国文社 2010, 232

5) Jacqueline M. Labbe ed., *The Works of Charlotte Smith* Volume 14. (London and New York: Routledge, 2007)

統を認めつつも、英語には適さないという意見に賛同している。さらにシェイクスピア式で書かれたソネットの多くも、自分のソネットの語り手に合わせて変化を加えている。そのような実験的である意味「自由な」ソネット創作により、ソネットはあらゆる階級・年齢・性別の人々に受け入れられるものになっていった。

キーツが詩を書き始めたのは、このようにすでにソネットが復権している時代だった。

最初のソネット「平和に」“On Peace”は1814年4月に書かれたと考えられているが、ababdcdd ddedeeとシェイクスピア式オクターヴにペトラルカ式セステットを組み合わせた押韻形式のソネットである。ヘレン・ヴェンドラー（Helen Vendler）が「ハイブリッド」と呼ぶもので、この組み合わせは1つしかない。⁶⁾しかし2作目以降はしばらくペトラルカ式で制作されることになる。

キーツが詩作を始めたのは、通っていたクラーク学校の友人であり、校長の息子チャールズ・カウデン・クラーク（Charles Cowden Clarke）の影響である。キーツに『エグザミナー』*Examiner* 誌やリー・ハントを紹介し、ハントにキーツの詩を紹介した張本人でもある。その最初の詩が、1815年2月2日、ハントが皇太子を中傷した記事を掲載したかどで2年間服役していたところから出獄するのを迎える行くクラークに託したとされる、「リー・ハント氏が出獄する日に書かれた」“Written on the Day that Mr. Leigh Hunt left Prison”ソネットである。この中でキーツは「優しいハント」“Kind Hunt”に対して、「煽てられた国家に真実を見せた」“showing truth to flattered state”正義の人、「偉大なる寵児」“Minion of grandeur”であり、「不滅の精神」“immortal spirit”を持ち、「彼の運命ははるかに幸せで、高貴」“far happier, nobler was his fate”であ

り、「真の天才」“genius true”と褒めたたえている。ハントが賞賛していたスペンサーやミルトンの名前もちりばめられている。

キーツの最初に活字になった詩も、クラークがハントに見せた詩の内の1編のソネット「孤独に」“To Solitude”で、書かれたのは1815年秋11月とされるが、1816年5月5日号の『エグザミナー』に掲載された。

ハントの『リミニ物語』*The Story of Rimini* が1816年2月に出版される。ヒロイックカブレットで書かれた物語詩である。キーツは自分も長編詩を書きたいと思い、すぐに模倣した詩“Specimen of an Induction to a Poem”（68行），“Calidore”（162行、断片）、さらにソネット“Woman! When I behold thee flippant, vain”を書いた。1年後にもソネット“On The Story of Rimini”を書いている。1816年夏から12月にかけて“I stood tip-toe upon a little hill”（242行）はヒロイックカブレットで書かれたが、モットーに『リミニ物語』3巻430行からの引用“Places of nestling green for poets made”が掲げられている。文体や語彙におけるハントの影響はすでに指摘されているところである。⁷⁾

キーツが実際にハントに会ったのは1816年秋10月19日であるが、それからしばしばハムステッドのハントの家を訪ねることになる。次に『エグザミナー』に掲載されたのは1816年12月1日、「チャップマン訳ホーマーを最初に読んで」“On First Looking into Chapman's Homer”のソネットである。このチャップマン訳『ホーマー』も、クラークがハントに借りたもので、おそらく10月25日の夜に二人で読んだと思われ、翌26日朝にはこの詩が出来ていたということである。この本はハントが友人から借りていたもので、つまりまた貸しになるのだが、『エグザミナー』（8月25日）に“CHAPMAN, whose Homer's a fine rough old wine”と掲載

6) Helen Vendler, “John Keats: Perfectioning the Sonnet”, *Coming of Age as a Poet* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2003), 47.

7) Cf. Lawrence John Zillman, *John Keats and the Sonnet Tradition: A Critical and Comparative Study* (Los Angeles, Calif.: Lymanhouse, 1939)

していた。ニコラス・ロウ (Nicholas Roe) はこれをキーツに訴えかける計算されたものだったとしており、クラークに本を貸したのもキーツがチャップマンのしたことから学ぶことをわかっていただからだと考える。⁸⁾

「キリギリスとコオロギ」“On the Grasshopper and Cricket” は同年12月30日、ハントと同じ主題で15分という時間制限を設けて競争して書かれたソネットである。その場にいたクラークによるとキーツの方が早く完成し、詩についてもハントに賞賛された。しかしキーツ本人はその日の帰り道で、ハントの詩の方が好きだと言ったとクラークは伝えている。⁹⁾「地上の詩は決して死なない」“The poetry of earth is never dead” という印象深い冒頭の言葉は、9行目すなわちセステットのはじめに「地上の詩は決して絶えることはない」“The poetry of earth is ceasing never” と繰り返される。この詩の中に多用される“never” と“ever” はシェイクスピアの『リア王』のエコーであるという見方もある。¹⁰⁾ また、オクターヴの夏とセステットの冬の情景の対比は、ペトラルカ式の二重形式の利点を最大に生かしたものと評価されるが、後に書かれる「秋に寄せて」“To Autumn” のオードを想起させる。「秋に寄せて」にも“Until they think warm days will never cease” (l.10) や“Hedge-crickets sing” (l.31) という詩句がある。

このソネットの競作はハントの主催でたびたび行われていたもので、『ブラックウッズ・マガジン』*Blackwood's Edinburgh Magazine*でも批判された。¹¹⁾ 1817年3月にキーツの最初の詩集*Poems*が出版されるが、その頃に書かれたと思われるソネット“On Receiving a Laurel Crown from Leigh Hunt”も、ハントの家で月

桂樹の冠を被せあった際に作られた詩であるが、“Minutes are flying swiftly” (l.1) や“Still time is fleeting” (l.9) の表現から、競作が行われたと考えられている。実際ハントにも“On Receiving a Crown of Ivy from the Same”というソネットがある(‘the Same’ とはキーツのことである)。

1817年のこの詩集には33編中ソネットが17編収録された。更にこの詩集の冒頭にはハントへの献辞のソネットが掲げられている。キーツはハントの『初期作品集』*Juvenilia*第3版を所有していたが、これは雑録・翻訳・ソネット・牧歌・哀歌・オード・讃歌と最後に長編詩で構成されており、この本に倣って様々なジャンルの詩で構成された本を作ろうとした。¹²⁾ 因みにこの本はハントが12歳から16歳の間に書いた、若いというよりむしろ幼い作品が収められている本だが、当時は「神童」と呼ばれ、多くの購読者を集めて版を重ねていた。¹³⁾

ここまで見てきたように、キーツの初期のソネットはまずその創作のきっかけ、主題からペトラルカ式という形式にいたるまで、ハントが大きく関わっていた。

That Hunt habit of sonneteering and his preference for the Petrarchan form influenced Keats, is attested by the similarity of the latter's sonnets to Hunt's in form, subjects, and allusions, and by the direct references to Hunt.¹⁴⁾

同じことをもう少し厳しい目で見ると次のようになる。

Fully half of his sixty-two sonnets bear

8) Nicholas Roe, *John Keats: A New Life* (New Haven and London: Yale University Press, 2013), 108.

9) *Atlantic Monthly*, Vol.7, No.39 (Jan. 1861)

10) Nicholas Roe, 137.

11) “On the Cockney School of Poetry, No.VI”, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, October 1819.

12) ただし、この中の「ソネット」の項に収められた10作品のうち14行詩は6点で、3編はシェイクスピア式、3編は ababedcdefef というシェイクスピア式の変形である。

13) Nicholas Roe, 132.

14) Barnette Miller, *Leigh Hunt's Relations With Byron, Shelley and Keats* (New York: Columbia University Press, 1910), 55-56.

the indelible imprint of Hunt in style and treatment: they are primarily exercises, bagatelles.¹⁵⁾

3

では、そのハントのソネットに対する考え方はどのようなものだったのか探してみたい。ハントのソネットに対する関心は、『ブラックウッズ』誌にも諷刺されているところだが、死後出版になった、*The Book of the Sonnet* (1867) という本を編集していたことにも表れている。¹⁶⁾ ソネットのアンソロジーの前に、「ソネットと呼ばれる詩の修練、歴史、種類の多様性について」と題されたエッセイが約90ページにわたり掲載されている。内容はⅠ：ソネットの修練の好ましさについて、Ⅱ：ソネット、特に正統と呼ばれるソネットの性質と特性について、Ⅲ：ダンテとペトラルカのソネット、Ⅳ：その他のイタリアの重要なソネット詩人、Ⅴ：その他の正統だが陳腐なソネット、特にコミック・ソネットについて、Ⅵ：英国のソネットと変則的ソネットについて、である。

この中からまずわかることは、ソネットの「修練」“cultivate”という言葉を使用していることである。序にかえて共同編集者のサミュエル・アダムズ・リーに宛てた手紙が掲載されているが、その中でも次のように述べている。

I cannot help looking upon myself, in this matter, as a kind of horticulturist who has brought a stock of flowers with him from Italy and England, for the purpose of diffusing their seeds and off-sets, wherever the soil can be found congenial; and therefore, with your leaves, and the privilege of free-speaking which is conceded

to guests and graybeards, I hereby notice, that if in the course of a few years from the date of this intimation a good crop of Sonnets, of all hues and varieties, does not start up throughout the said quarters, like a new flush of beauty to your meadows, or song to your groves, (for birds and flowers grow ripe together)... (xiii-xiv)

このように自らを「園芸家」と称し、ソネットを「花」や「作物」に例え、種を蒔き、耕し(cultivate) 実らせるというイメージを持っていることがわかる。この手紙ではワーズワスの例の詩が引用されており、エッセイの中で「ソネットを軽蔑する」人々に対して、正しいソネットの知識を持てば決して軽蔑などできないであろう、とこの本が啓蒙書となることへの希望が述べられている。これは彼の最晩年の言葉であるが、キーツら若い詩人達を周囲に集めていた時も、キーツにソネットの競作をさせた時も同じような感覚を持っていたのではないかと想像することはできる。

次にハントのソネットに対する考えであるが、ソネットの良い点についてはエッセイの第一章の中で、どんなことでも主題にできることなど5つ挙げているが、特に短いということとそれに付随することである。エッセイ第二章の中でソネットの音楽性を重視していることが繰り返される。まず初めにソネットの歴史と語源についての説明があるが、楽器を伴って演奏された“Sonata”がその由来で、楽器を使用しなくなった後でもその音楽性が求められている。音楽性を伴うのはあらゆる詩に共通であるが、特にソネットの熟成期には「詩人はみな詩人であると同時に音楽家であった」し、「ソネットは詩であると同様に音楽の一作品であるべき」だとハントは言う。(12) そして次のように続ける。

...so the composition called a sonnet, being a long air or melody, becomes naturally

15) Stuart Curran, *Poetic Form and British Romanticism* (Oxford: Oxford University Press, 1986), 52.

16) Leigh Hunt and S. Adams Lee ed., *The Book of the Sonnet* (London: Sampson Low, Son, & Marston, 1867)

divided into two different strains, each of which is subdivided in like manner; and as quatrains constitute the one strain, and terzettes the other, we are to suppose this kind of musical demand the reason why the limitation to fourteen lines became, not a rule without a reason, but a harmonious necessity. (13)

ソネット14行が2つの部分に分かれているのも、厳しいルールがあるのも、ハーモニーの必要性から生じるものなのである。

その後、完璧なソネットの必要条件について13項目にもわたって挙げられている。その1番目がイタリア様式に倣った正統派“Legitimate Sonnet”（オクターヴに2つの押韻、セステットに3つ以下の押韻）であるべきだということである。そのほかには、1つの主題に基づくこと、曖昧さがなく、不自然な押韻がないこと、不必要な単語がないこと、都合のために言葉を省略しないこと、押韻は正しく変化にとんだ対照的な韻を使用すること（同じ母音ではいけない）、終わりに向かって関心が高まるようにすること、などである。

このようにハントはソネットの本来の性質を重視し、それゆえに形式・押韻のルールを重んじ、ペトラルカ式ソネットを正統派ソネットとしていた。若い詩人キーツに正統派のソネットを書かせようとペトラルカ式ソネットを勧めたとしても不思議ではない。

第四章でイングリッシュ・ソネットを紹介する中では、サー・トマス・ワイアットが英国へのソネットの最初の紹介者であったことと、その若き友人サリー・伯ヘンリー・ハワードを初めて規則から逸脱し変則的ソネットを紹介した人として挙げており、英国に入ってきた当初から変則的なソネットが作られていたことを示している。一方、正統派ソネットの完璧な見本となり得たとして挙げられているのがミルトンである。ミルトンは「音楽家」であり、正統派の押韻は守っているが、四行詩と三行詩の分け目の

規則を無視したという。

そしてミルトンとともにソネットはイギリス詩から100年近く消えてしまった。その後、グレイ、ワーズワスにページが割かれ、アンナ・ソード、ヘレン・マリア・ウィリアムズ、シャーロット・スミスらが紹介される。これらの女性詩人たちの多くのソネットは変則的ソネット、14行を簡単に書ける“easy writing”と愛好者が増え、ワーズワスが正しいシステム“the right system”を回復するまで、ひどい詩が横行したという。しかし、ハントは彼女らの詩もアンソロジーに載せている。それと比べると、キーツについては「ホーマーについての素晴らしいソネットがある」ことしか触れられていない。

4

1817年の『詩集』はキーツや周囲の人々が期待していたほどは売れなかった。この時のことを後にクラークは、著者が「ラディカル」だということしか知らなかった、キーツは政治的な表明をしていないのに、「ラディカルな編集者」であるハントへの献辞を載せたためだと振り返っている。¹⁷⁾ この『詩集』が上手いかなかったことが、この後のハントとの関係とキーツ自身の詩作に何らかの影響を及ぼしていないとは言えないだろう。

後世に名を残す「偉大な詩人」になるために、キーツは早い段階から長編詩に取り組むことを自らに課していた。初期の「睡眠と詩」“Sleep and Poetry”の中で宣言したように、「パンとフローラの世界を出て」4000行の『エンディミオン』*Endymion*を生み出し、『ハイピリオン』*Hyperion*、『ハイピリオンの没落』*The Fall of Hyperion*の創作に力を注ぐことになる。

1817年4月、キーツはハントの元を離れ、ワイト島に滞在して『エンディミオン』に取り組

17) *Atlantic Monthly*, Vol.7, No.39 (Jan. 1861)

んでいたが、その間にヘイドンからハントには気を付けた方がいいという忠告の手紙を受け取り、それに対してキーツも “His self delusions are very lamentable” と返信している。¹⁸⁾ また、ヘイドンは『エンディミオン』をハントに見せないようにと忠告していたこともわかっている。

“Haydon says to me Keats dont show your Lines to Hunt on any account or he will have done half for you – so it appears Hunt wishes it to be thought. When he met Reynolds in the Theatre John told him that I was getting on to the completion of 4000 Lines. Ah! Says Hunt, had it not been for me they would have been 7000!

．．．．．

I must make 4000 lines I have heard Hunt say and may be asked – why endeavour after long Poem?

．．．．．

I shall have the Reputation of Hunt's elev  – His corrections and amputations will by the knowing ones be trased in the Poem”¹⁹⁾ (1817年10月8日) (下線筆者)

自分がハントの「生徒」と呼ばれることへの自覚あるいは自虐がここにはある。そしてハントがキーツの詩作に意見をしていたことがよくわかる。「添削 (訂正)」はともかく、自分の作品から詩行を削除されるのは手足を「切断」されるようなものである。ハントにしてみれば園芸家として剪定しているつもりだったかもしれない。

この1817年10月には、『ブラックウッズ』誌にジョン・ロックハート (John Lockhart) が “Z” という匿名で「コックニー・スクールについて」 “On the Cockney School of Poetry”

という文章の第1回目を掲載し、「コックニー・スクールの創設者」ハントを攻撃している。この時はまだ本文にキーツへの直接的な攻撃はないのだが、翌11月には第2回目が掲載された後に、キーツは手紙の中で、文頭に掲げられたコーネリアス・ウェブ (Cornelius Webb) の詩の中にハントとキーツの名前が「大文字で」並べられていることを挙げ、「第2回は自分に言及していることは疑いない」と述べている。²⁰⁾ 第2回の内容はほとんどがハントの「リミニ物語」の批判に費やされているのだが、最後に次のような文章で締めくくられている。

...and we confess, that we think that poet deserving of chastisement, who prostitutes his talents in a manner that is likely to corrupt milliners and apprentice-boys, no less than him who flies at noble game, ands his corruption among princes.²¹⁾ (下線筆者)

この「見習いの少年」の一人が自分であると認識したのであろう。

悪名高い「コックニー・スクール」への攻撃だが、これは教養ある保守派の『ブラックウッズ』や『クォーターリー・レビュー』 *Quarterly Review* が、自分たちとは政治的信条や社会的立場の異なるリベラル派のハントを攻撃したものである。確かにハントは『エグザミナー』などを発行するジャーナリストであり、皇太子に対する批判を掲載した罪で投獄されたり、政治的な発言をしている。しかしハントの周りに集まってきた詩人や芸術家たちの中には様々な人間がいて、パイロンやシェリーのように上流階級の詩人も関わっている。温度差があっても不思議ではなく、実際諍いも多い。コックスはハントを中心にしたこの集団を「ハント・サークル」と呼び、むしろ詩の手稿をお互いに見せ合

18) *Letters*, I, 135, 143.

19) *Letters*, I, 169-170.

20) *Letters*, I, 180.

21) “On the Cockney School of Poetry, No. II”, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, November 1817.

う昔の同人サークルと前衛的な文芸運動の間にあるようなものと位置付ける。²²⁾ また、新興中産階級の消費文化における観点から、文学を民主化した活動の一つという捉え方もできる。²³⁾ しかし、ハントはことソネットに対しては、「イレギュラー」なもの、女性たちにも流行した“easy writing”のものには反対を唱え、保守的であったわけである。

キーツにも「平和に」や「コシチュシュコに」“To Kosciusko”など初期のソネットには政治的なものも見られるが、明らかにハントの影響が強いように思われる。コシチュシュコはポーランドの愛国者でアメリカ独立運動にも参加した、当時のリベラル派の崇拝の対象であり、彼に寄せる詩はハントもバイロンも書いている。キーツが『エグザミネー』で紹介され、その詩が他のリベラルな記事と並んで掲載されたことで、『ブラックウッズ』に“Keats belongs to the Cockney School of Politics, as well as the Cockney School of Poetry”と書かれたように、政治的にもハントの同志と捉えられ、攻撃対象となったのである。²⁴⁾

5

キーツのソネットの大きな転換点は1818年1月22日に書かれた40番目のソネット、『『リア王』を再読して』“On Sitting Down to Read *King Lear* Once Again”である。このソネットの押韻は前半のオクターヴはabbaabba とペトラルカ式であるが、後半のセステットはcdcdffとシェイクスピア式になっている。

O golden-tongued Romance, with serene lute!
Fair plumed Siren, Queen of far-away!

22) Jeffrey N. Cox, *Poetry and Politics in the Cockney School* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), 20-21.

23) Ayumi Mizukoshi, *Keats, Hunt and the Aesthetics of Pleasure* (New York: Palgrave, 2001), 7

24) “On the Cockney School of Poetry, No. IV”, *Blackwood's Edinburgh Magazine*, August 1818.

Leave melodizing on this wintry day,
Shut up thine olden pages, and be mute.
Adieu! For, once again, the fierce dispute
Betwixt damnation and impassioned clay
Must I burn through, once more humbly
assay
The bitter-sweet of this Shakespearian fruit.
Chief Poet, and ye clouds of Albion,
Begetters of our deep eternal theme!
When through the old oak forest I am gone,
Let me not wander in a barren dream,
But, when I am consumed in the fire,
Give me new Phoenix wings to fly at my
desire.

これ以前のソネットは、最初の「平和に」を除いて全てペトラルカ式で書いてきたのだが、この後に書かれたソネット25編中15編はシェイクスピア式で書かれている。

ヴェンドラーによるとこの詩では二人の詩神に呼びかけているという。²⁵⁾ 前半はロマンスの女神に歌をやめて沈黙するように呼びかけて、別れを告げている。その理由はシェイクスピアの苦い甘さを試すためだという。そして後半は男性の詩神、最高の詩人、アルビオン雲に呼びかけている。ここには、現実から遠く離れたスペンサー的ロマンスの「空しい夢」の世界に別れを告げ、現実のイングランドのシェイクスピアの古い森を彷徨う覚悟をし、地獄の炎で肉体が燃え尽きるような悲劇を受け入れて、「新しい不死鳥の翼」すなわち永遠に残るような詩を書く力を求めることが表されている。詩人のスペンサーのロマンスからシェイクスピア悲劇への転向の決意をソネットの主題として、それをペトラルカ式オクターヴからシェイクスピア式セステットへと形式的にも表した詩となっているのである。

2週間後の2月5日にも同様にスペンサーに呼びかけるソネット “Spenser! A jealous

25) Vendler, 63.

honourer of thine”を書いている。スペンサーの崇拜者が「あなたの耳を喜ばせる努力をするように英語を洗練する約束を求めた」“ask my promise to refine / Some English that might strive thine ear to please.” (ll.3-4) という。自分は「冬の地上の住人」で、「フィーバスのように立ち上がる」とや「労苦から逃れること」は「不可能」だと述べる。このスペンサーの崇拜者とは前日に会っていたレノルズ (John Hamilton Reynolds) だと考えられているが、彼もハント・サークルの一人である。

この「リア王再読」のソネットが書かれた1818年1月はちょうど『エンディミオン』の印刷の準備をしている頃だった。『エンディミオン』の副題はまさに「ロマンス」“A Romance”である。『エンディミオン』を世に出すことによって名声を得ようとしているところではあるが、胸の内ではその「ロマンス」に別れを告げてシェイクスピア的悲劇の方向へ進み出していたのである。

このソネットが書かれた前日、1月21日には「ミルトンの髪房を見て」“On Seeing a Lock of Milton's Hair”を書いている。これは、ハントの家で本物のミルトンの髪を見せられて競作した詩だが、ソネットではなく41行に渡る詩になっている。ハントは同じ主題で3編ものソネットを書いているのだが、なぜキーツはこの時ソネットを書かなかったのだろうか。キーツは23日付ベイリー宛ての手紙に“Ode”と冠してこの詩を載せた後に“This I did at Hunt's at his request – perhaps I should have done something better alone and at home”と書いている。²⁶⁾ この詩は10行、21行、10行の3連から成るが、第2連を11行と10行に分けると、それぞれabab ccdeedのような4行+6行の4連から構成されることになる（ただし第2連前半はccdeeffと1行多い）。シェイクスピア式4行とペトラルカ式セステットのこの形式は後の1819年5月に書かれるオード群とほぼ同じもの

である。“Ode to a Nightingale”は10行8連、“Ode on a Grecian Urn”は5連、“Ode on Melancholy”は3連、“Ode on Indolence”は6連である。キーツの言う“something better”はソネットで書くべきだったのに書けなかったことを意味するのだろうか、それともオードとしてもっと完成されたものを書きたかったのだろうか。いずれにしても、キーツの言葉からハントとの競作への不満、制限された時間内での詩作に対する不満、ソネットという形式への不満を読み取ることは可能であろう。このハントとの競作の場において（万が一ソネットという限定がなかったとしても）、ソネットを書かずにオードを書いたということはその後の道につながる非常に大きな一歩だったと言えよう。

2月4日には再びハントとシェリーとの競作が行われ、“To the Nile”が書かれたが、これは1818年1月以降では数少ないペトラルカ式ソネットの1つである。しかしその前日の2月3日付レノルズ宛ての手紙の中では“I will have no more of Wordsworth or Hunt in particular”と言っている。²⁷⁾ その後に続く“Why should we be owls, when we can be Eagles?”とはまさにハントの影響下にあるがゆえに自分の才能が認められない、「コックニースクール」というレッテルを貼られることから脱却したいという叫びのように思われる。

3月21日付ヘイドン宛ての手紙には“It is a great Pity that People should by associating themselves with the fine[st] things, spoil them”として、ワーズワスやハズリットと並んで一番初めに“Hunt has damned Hampstead [and] Masks and Sonnets and italian tales –”と挙げられる。²⁸⁾ 「ハントはソネットをダメにしまった。」具体的なことは述べられていないが、ハントのソネットに不満を持っていたことを表す一番明らかな文章である。

これらの詩や手紙から、キーツがハントから

26) *Letters*, I, 212.

27) *Letters*, I, 224.

28) *Letters*, I, 252.

脱却しようとしていたこと、そしてそれがソネットの形式の変化と同じ時期に重なっていることが分かる。それはハントへの反抗心というだけではなく、自分の理想とする詩の形式を追い求める過程であった。その後もハントとは少し距離を置くことはあっても決別することではなく、ハント・サークルに留まったまま一生を終えた。しかし詩作の面ではハントの影響をはるかに超えていくことになる。

6

キーツのソネットの中でも異色なのが62番目に書かれた“If by dull rhymes our English must be chain'd”である。これはペトルカ式でもシェイクスピア式でもない「イレギュラー」な押韻形式である。abc ab(d)c abc dedeと3つの三行詩と四行詩の組み合わせにdが入っている形と考えることもできる。

If by dull rhymes our English must be chain'd
And, like Andromeda, the Sonnet sweet
Fettered, in spite of pained loveliness,
Let us find out, if we must be constrained,
Sandals more interwoven and complete
To fit the naked foot of Poesy.
Let us inspect the lyre, and weigh the stress
Of every chord, and see what may be gain'd
By ear industrious, and attention meet;
Mist'ers of sound and syllable, no less
Than Midas of his coinage, let us be
Jealous of dead leaves in the bay wreath crown;
So, if we may not let the Muse be free,
She will be bound with garlands of her own.

つまらない英語の韻律に縛られなければならないならば、より良い完璧な詩脚のためのサンダル、すなわち脚韻を探し出そうという、まさに

ずっと模索してきた英語によるソネット詩作が主題になっている。そしてその主題を新しい脚韻形式で表そうとした試みなのである。

弟ジョージ夫妻に宛てた2月から書いていた日記形式の手紙の最後、5月3日に「サイキへのオード」を載せた後にこの詩が書かれているが、自らこの詩について語っている。

Incipit altera Sonnetta.

I have been endeavouring to discover a better sonnet stanza than we have. The legitimate does not suit the language over-well from the pouncing rhymes – the other kind appears too elgai[a]c – and the couplet at the end of it has seldom a pleasing effect – I do not pretend to have succeeded – it will explain itself – ²⁹⁾

やはり“legitimate”という言葉を使い、ペトルカ式ソネットは英語には合わない、しかしもう一つの、すなわちシェイクスピア式ソネットも哀歌調すぎるし、最後のカプレットは減多に心地よい効果を表さない。だから今あるものよりよいソネットのスタンザ（連）を見つけようと努力してきているというのだ。シェイクスピア風ソネットが哀歌調であるということからはシャーロット・スミスらのソネットが想起される。キーツが直接シャーロット・スミスに言及したものは残されていないと思われるが、念頭にあったとしても不思議ではない。

キーツほど「書くことについて書く」のに時間を費やしたロマン派詩人はいない、とも言われる。³⁰⁾ 若さに起因することでもあるが、自分に合った「より良い完璧な」詩の形を常に求めていたがゆえのことだろう。

29) *Letters*, II, 108.

30) Curran, 52.

7 おわりに

その後、果敢に挑んだこの実験的な詩形が使われることはなく、ソネットも2編しか作られなかった。「ワイアットやサリーの時代からキーツに至るまで、ソネットの歴史は多かれ少なかれ実験の歴史である」という言葉の通り、ソネットの実験を繰り返したのはキーツだけではない。³¹⁾しかしキーツはソネットという14行の形式に収めることができなかった理想を、ソネットから発展させたオードの形式に結実させていく。それは英語でのソネットへの挑戦を通して、詩作の修練を積むことによって初めて成

し得たことである。ハントの提示したペトラルカ式ソネットにも、シェイクスピア式ソネットにも縛られず、自分の理想の詩形を求める道がキーツの求めていた名声への道につながっていたのである。

キーツの詩と手紙の引用は全て次の本による。

Jack Stillinger ed. *The Poems of John Keats*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press 1978.

Hyder Edward Rollins ed. *The Letters of John Keats 1814-1821*, 2 vols. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 2001.

31) T.W.H. Crosland, *The English Sonnet*, (London: Martin Secker, 1917), 64.